

R18
adult onry



Summer
holiday,
Again.



・2年生くらいの夏休み

・スーシィとアッコが付き合ってる

・キスはしてる

・えっちなことはまだしてない



それじゃ
二人とも

ごめっ
ごらんね
バーバラね！



ふあーい
はい！

夏休み
くらいは
仲良くね！



山とか海とか
都会の方でか
買物したり
食べ歩きたり
とかさあ！！

今年も
補習受けなきゃ
いけないアッコが
それ言う？

うっ…



いいなあロツテ
今年も
ナイトフォールの
聖地巡礼の旅かあ

今年はいっぱい付まて
出かけたいわ

あたしたちも
どこか
出掛けたいなあ



ま
出かけたら
補習と宿題と
レポートの
三重苦に
なっちゃから
ないんじゃない？

そうかも
けしれない

そうじゃなく
ってさあ…



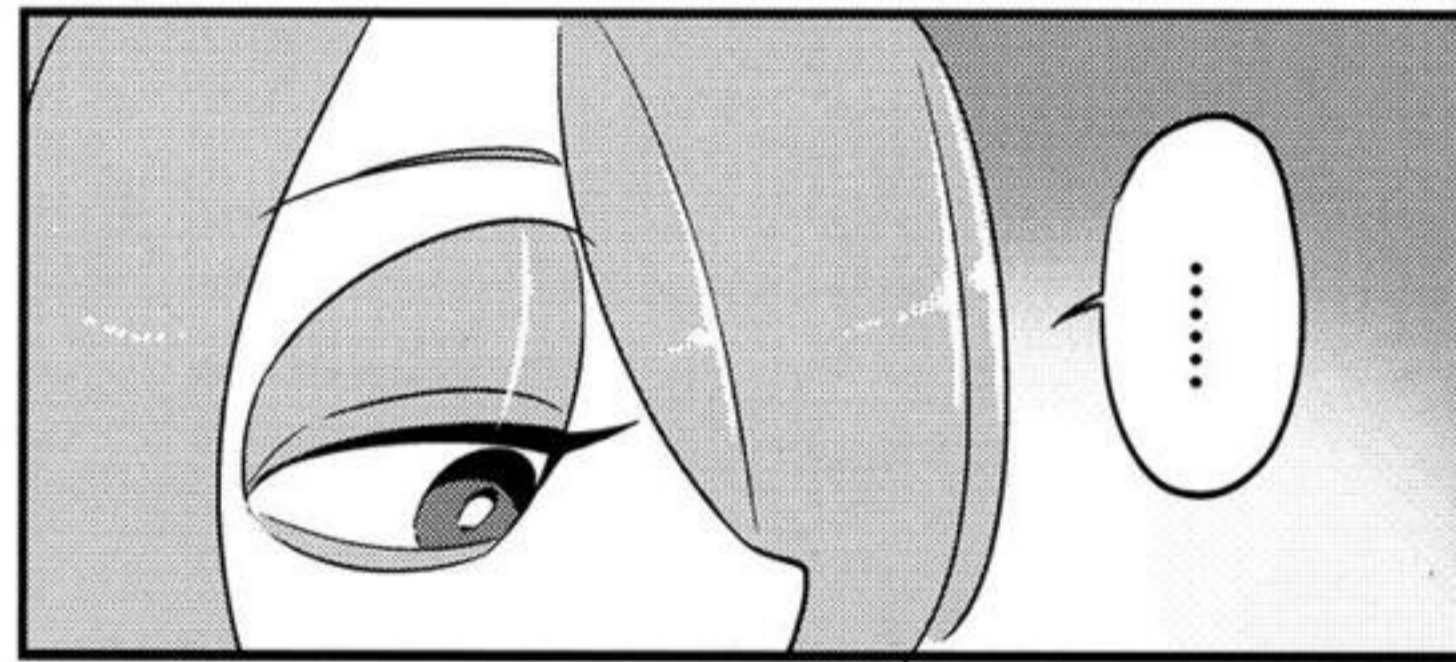
…いや、
でも一つだけ…



去年と
変わらなくて
安心するよ

そういう
スーシイ
だって…

かちや





そんなあり
折角二人きりに
なったってのに…

これだけって
ひどくない？

なーに朝から
盛ってんのさ
エロアッコ

いいじゃんキスくらい!!
久々なんだし!!

こっちにも
都合があるんだから
我慢しなよ

それじゃ
あたしも
街に連れてってよ!!

ひまっ!!

別にあたしは
いいけど…

アッコは
今日から
補習授業じゃ？

今日は
午後から!

それなら
一緒に行ける
でしょ!?

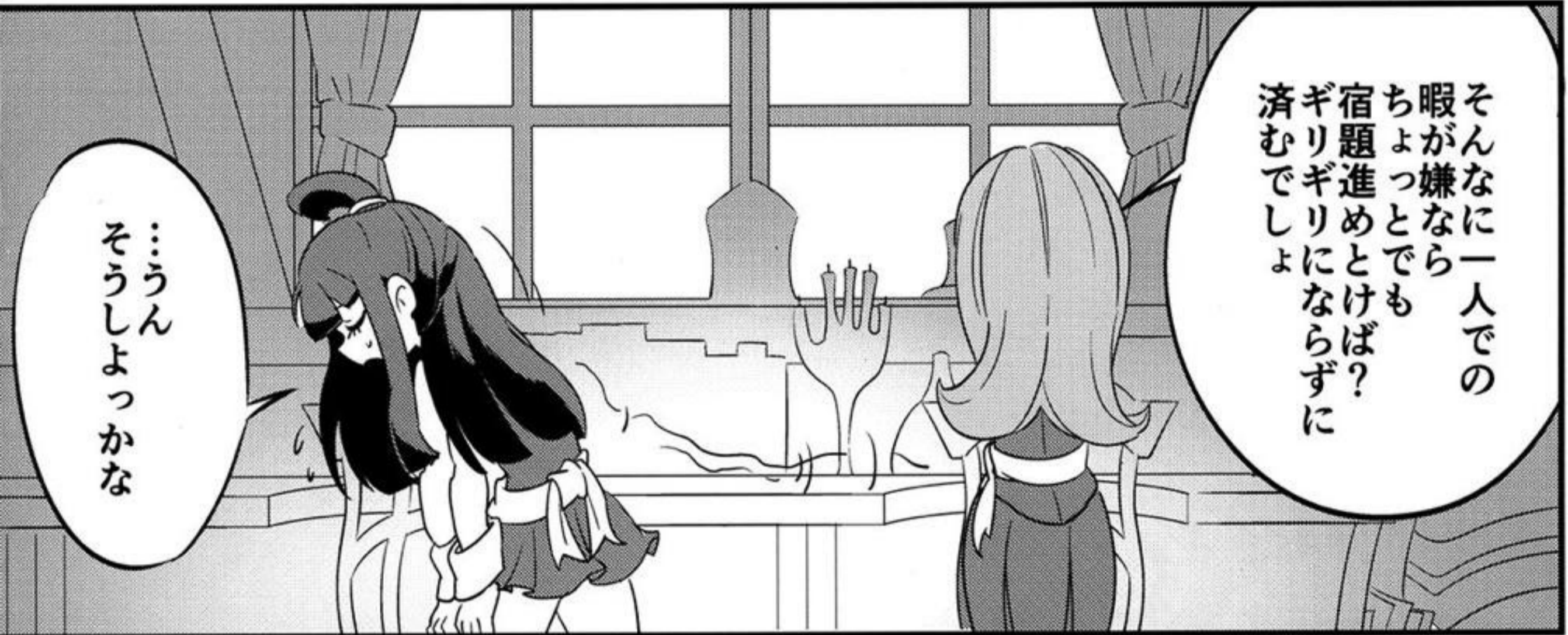
あ…

アッコいつつも
買い物遅くなるから
午前中じゃ帰れないね

そんな事
ない!

やめときな

去年より
ファイネランも
監視の目
だらうし…



ダイアナに
教えてもらおう!!

最近優しいし、
去年よりは
言ってることも
わかるように
なってるかも!

…どうせ
アッコにや

言ってることの
半分も
理解できないよ

そんなことない!
去年のあたしとは
違うんだから!

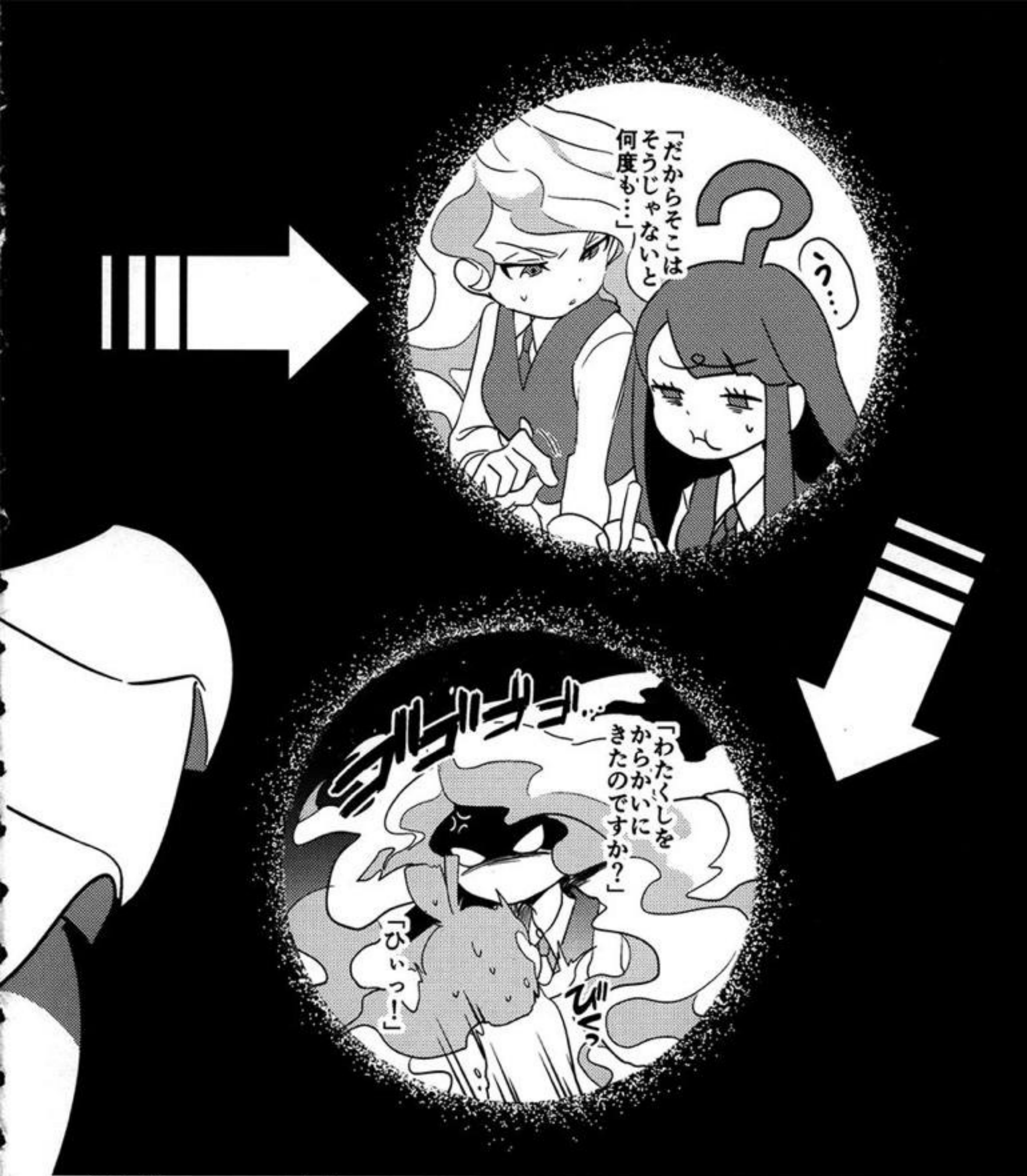
動物ばっかりの
変身魔法と
ほんの数センチ
の宇宙に浮いた
事以外は

なっ…

変わんないよ

何よ!
そんな言い方
なくない!?

本当の事
言っただけ
でしょ



「だからそこは
そうじゃないと
何度も…」

「う…」



「わたくしを
からかいに
きたのですか？」

「ひっ！」



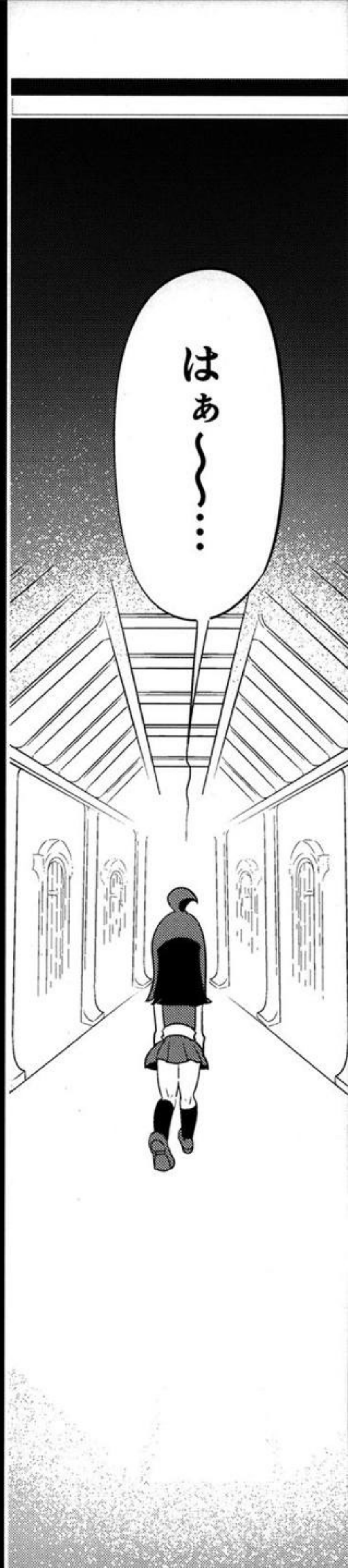
「今日来なかった分の課題です。
明日のためにちゃんと
目を通しておくように」



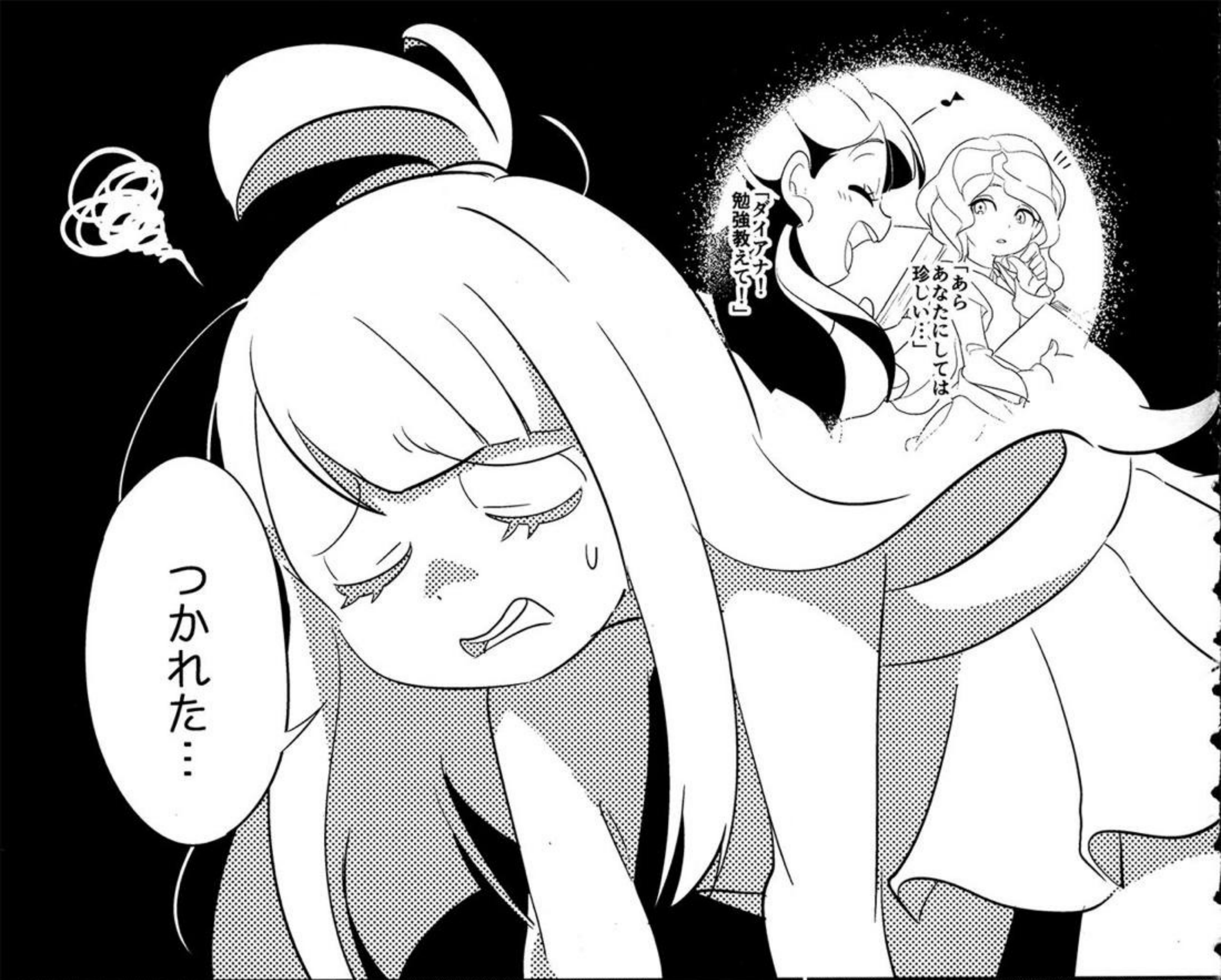
「ええ!?こんなにっ!？」

スーシイの
言つてた事
ほつちやうし
な

補習授業の事も
すっかり
忘れてて最悪…



はあ〜…



つかれた...

「ダイアナ!
勉強教えて!」

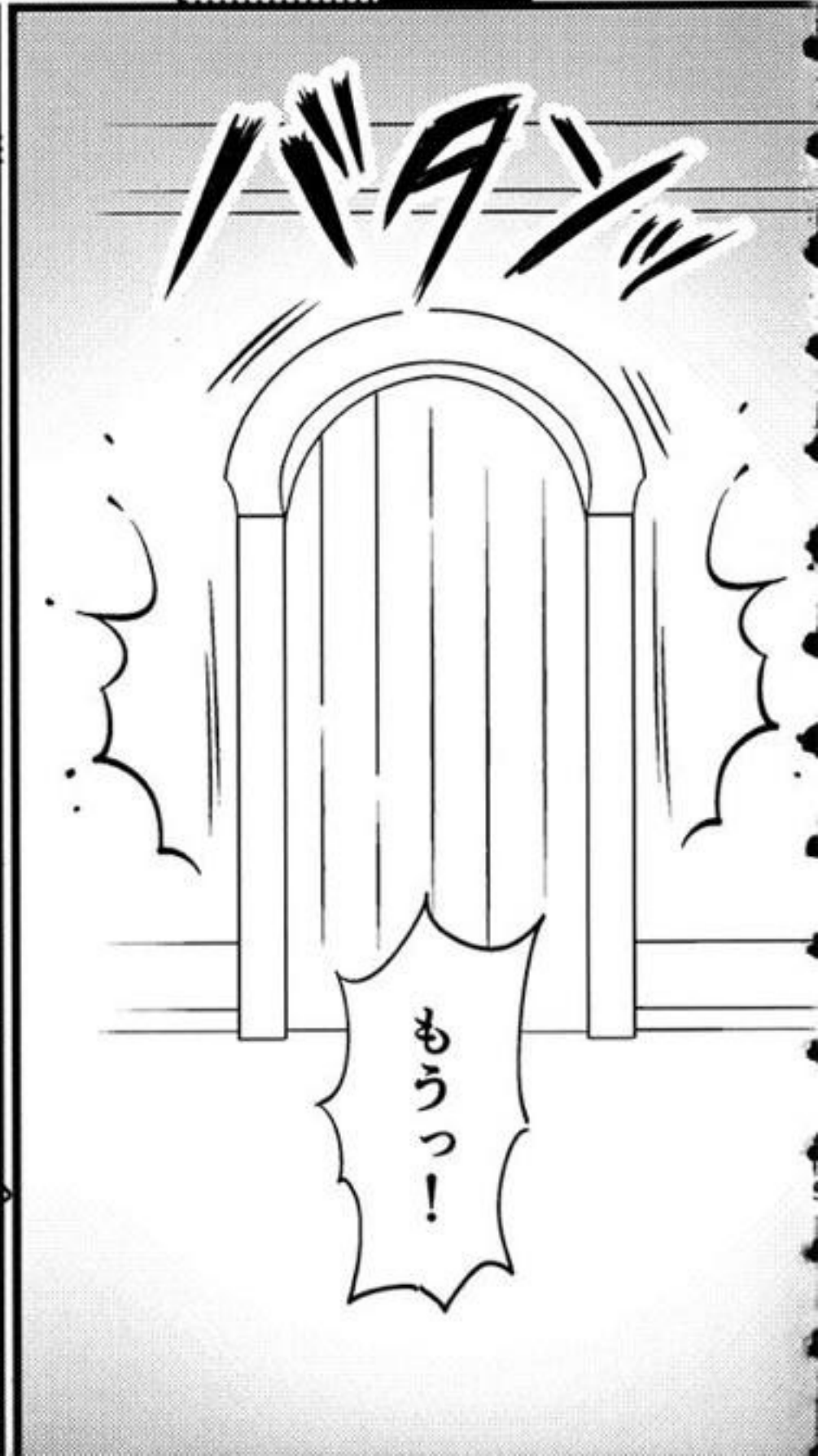
「あら
あなたにしては
珍しい!」



...ん?



こうなったのも
全部スーシイ
が...



もうっ!

どうせアッコのことだから
色々あって放置してるだろうと思って、
少しでも手助けになりそうな薬
用意しといたよ。飲みな。

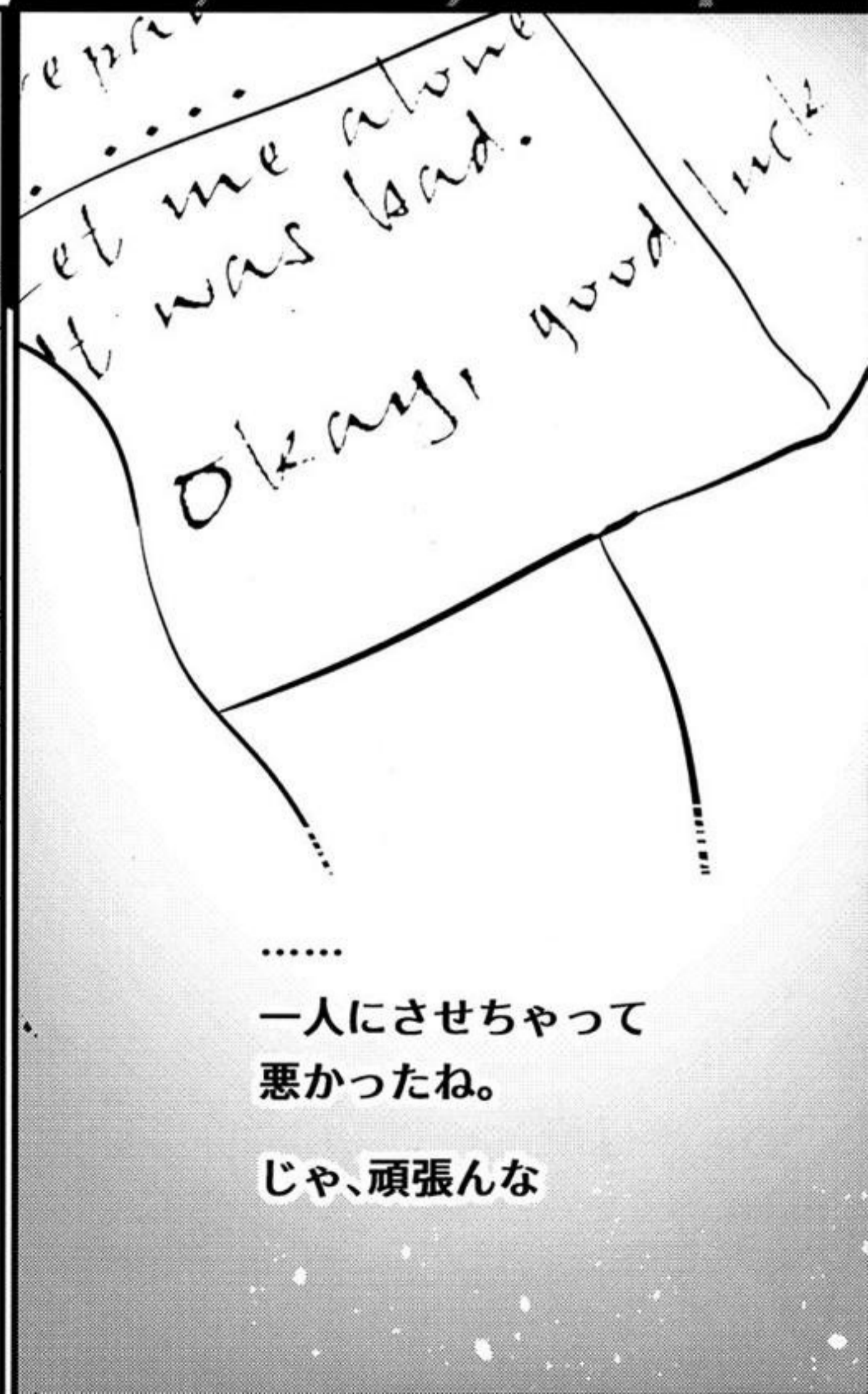
Because it's all about
I thought that I would help
Medicine that seems to help
I prepared. Sink.
.....
Let me alone
It was bad.
Okay, good luck



薬...と
手紙?

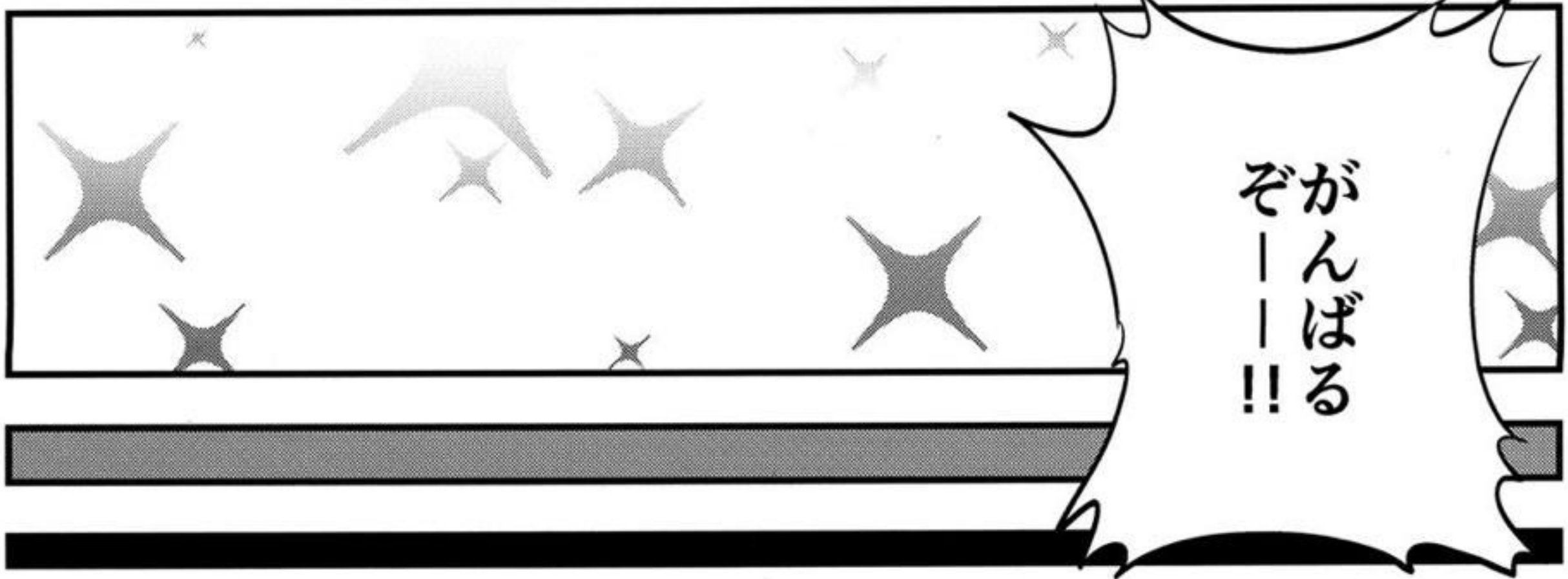
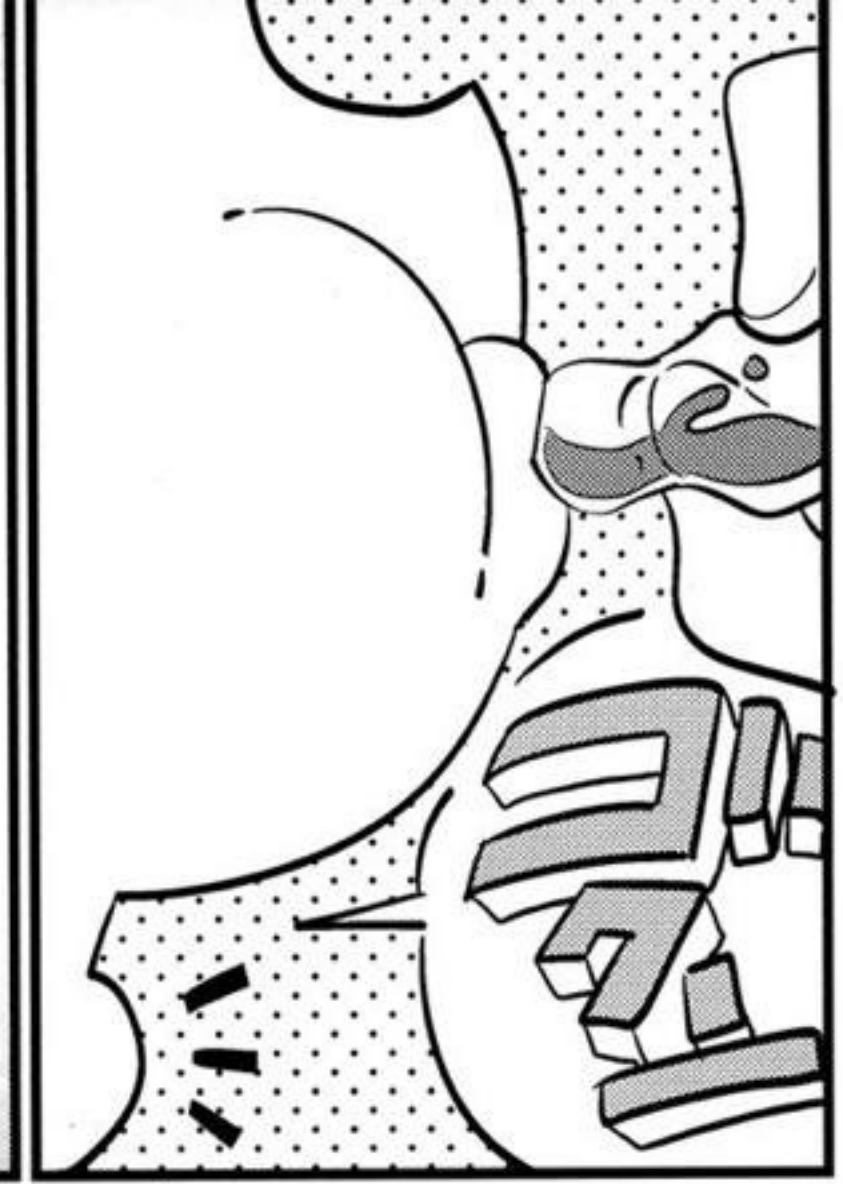


スーシイ...!!

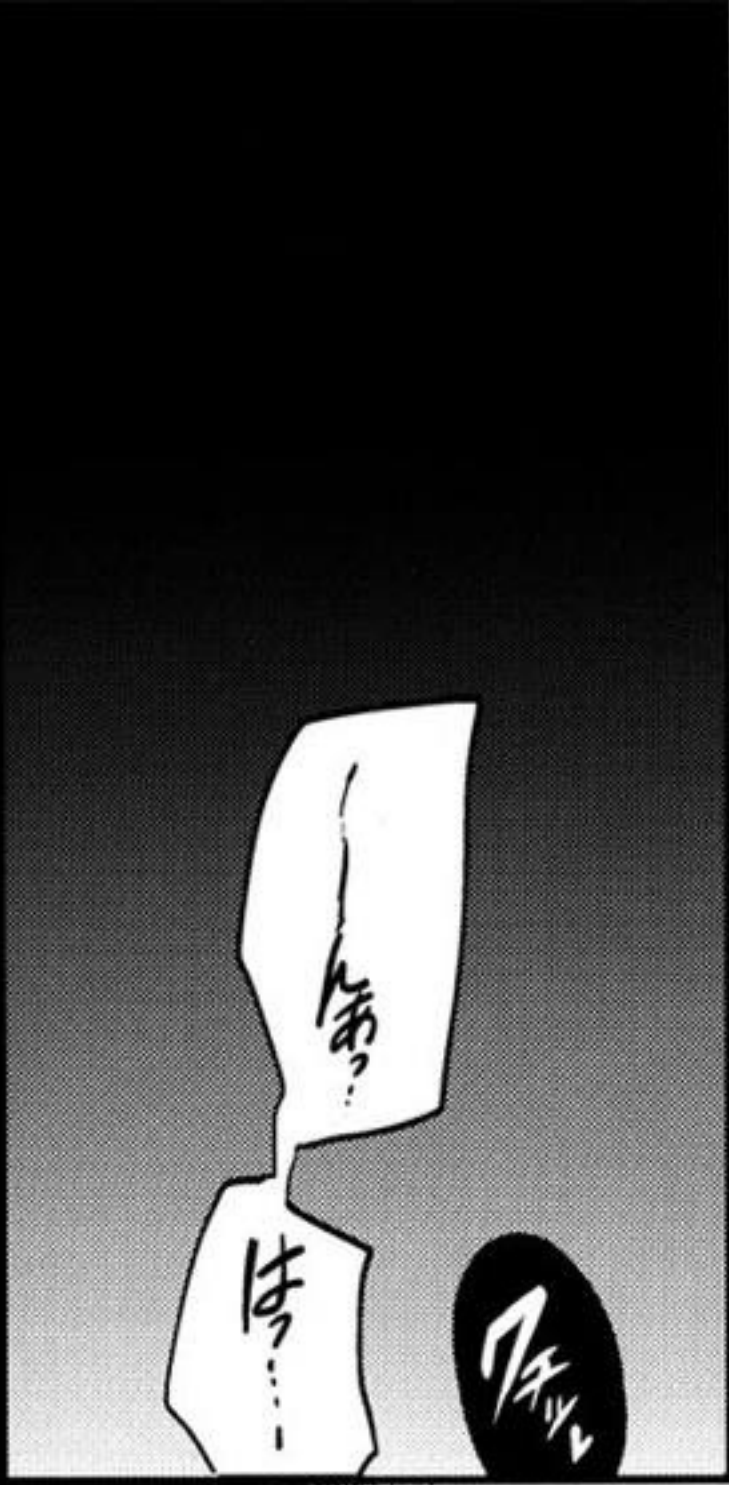


.....
一人にさせちゃって
悪かったね。

じゃ、頑張んな









また
変な夢
見ちゃった...

やだ...っ



—あれが
未だに
夢なのか
現実なのか
わかんないけど...

はあ...

はあ

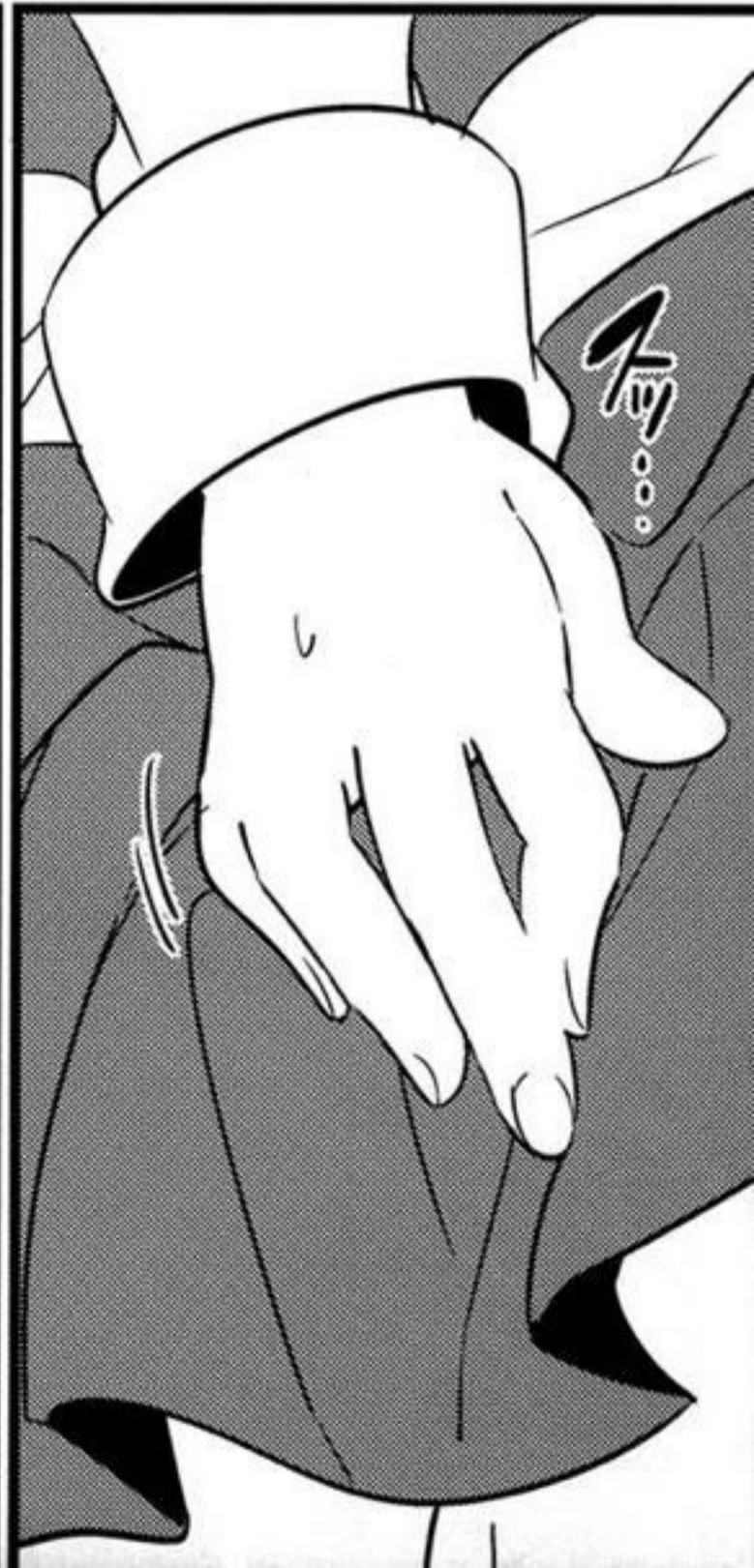
あたしは...



我慢できな...

カチカチ

...も





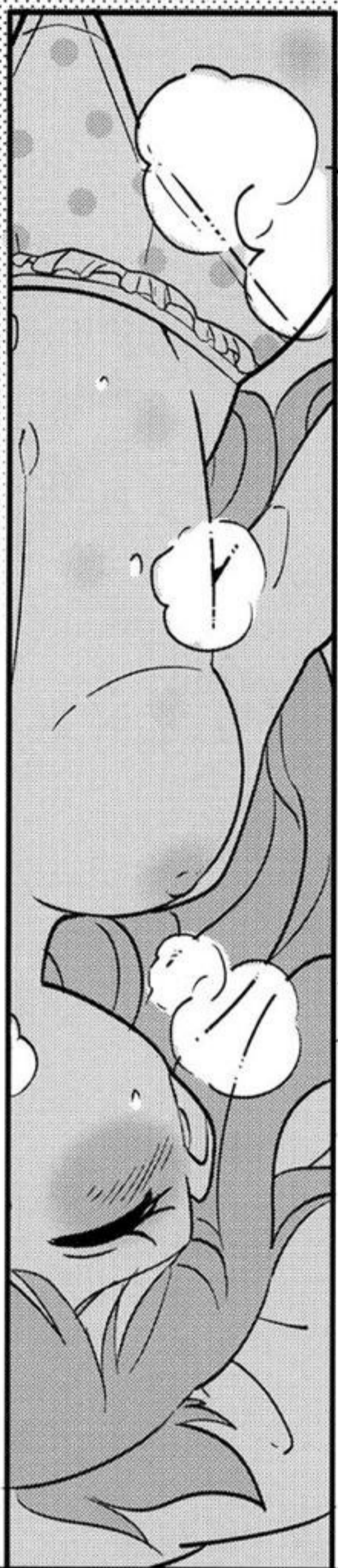
きいっ



知りたい？









今更手え
押さえたって
大きな声
漏れちゃってるよ

そんな
抵抗したって…



やーらし♡

ぐちゃぐちゃ
じゃん

っしょ

ひっ



すぐに無駄に
させたげる

うあっ…!?

っしょ…



っしょ

っしょ

っしょ

っしょ



スーシィ : :

はぁ...

はぁ...

おかしくなつちやうう...!!

はぁ...

はっ...

グキッ

グキッ



おかしくなつちやえばいいよ

あたし以外のことを忘れるくらい

あぁ...

あぁあぁあぁ

あぁあぁあぁ

グキッ

グキッ





ちゅっ

待っ…
そこは…!!

スーシイ…!?

あっ…
あ…っ!!

おっ!!

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ



いつから起きてたの？



ごめんね
スーシイ

その：
二人きりに
なったからって
はしゃいで
振り回しちやったり

それと…

我慢してたのに
無理やり
誘うようなこと
しちやって…

スーシイの気持ち
全然考えてなかったね…



ゆる…
ゆるして
くれない？



いつもいつも
他人を巻き込んで
振り回してるくせに
よく言うよ

何を今更



いっ!!

がっ

ゆるさない





世界中の
誰よりも
愛してる



好きだよ
アッコ



あつ
あたしだって...!!



キーン
顔真っ赤

すっ...スーが
恥ずかしいこと
言うからでしょ!!

こういう言い方
好きなくせに



ほっ



ちゅっ

好き...

大好き...

ちゅく

ちゅっ



ちゅ♡



だよねー

もちろんアッコに盛るための薬だよ

ギツツツ



そっか... それなら今日は材料を調合して待つてようかね

...もしかして昨日の買い出しって



...どうする? 続きする?

はあ...

したいけど... 明日、というより今日補習授業あるから...

はあ...



ねいんう...

寝ちゃえぼ?

まだ夜中だしね



はあ...

昨日振り回したってお詫びと思つて諦めろ



変なのだはやめてよね...



おやすみの
チューしてよ

ちゃんと
付き合っ
てあげる
代わりにさ

それじゃあ
今日の実験

!



…ははは

ちゅッ

——こうして あたしたちの
長い夏休みが 始まった

夏の魔法

「あーっ、やばい！」

日本なら、きつと蝉が鳴き始めている七月半ばのこと。アッコは椅子に座ったまま、あぐり口を開け、背中を仰け反らせながら頭を掻き繕っていた。夏だから汗をかくのは自然なことだけれど、毛穴から噴き出ているのは冷や汗だった。

「ど、どうしたの、アッコ？」

端から見ているだけでも、アッコの反応は常軌を逸しているのだろう。隣の椅子に座っていたロッテは、ぎよつとした顔でアッコに尋ねかける。

アッコは仰け反らせていた身体を前に倒し、机にべちゃりとくつつかせた。汗まみれの身体が机にくつついて、最高に気持ちが悪い。

「試験勉強、必死にやってたら航空券取るのすっかり忘れてた……」

「そもそも、アッコは受かるかわかんないんだから、航空券取れくない？」

スーシイは自分のベッドに腰掛けたまま、馬鹿馬鹿しいとでも言うように肩を竦めさせている。アッコが航空券を取りそびれたことを、スーシイは心底嘲笑っているかのようだ。

アッコはがばつと机から頭を上げて、後ろを素早く振り向いた。悔しそうに牙を剥き、スーシイを睨んだ。

「でも受かったじゃん、結果的に！」

「はいはい、結果的にね」

スーシイはにんまりと笑って、楯突くアッコをもものとしなかった。

「うぐっ……」

案の定、アッコは言葉に窮してしまった。

昨年、落第寸前で夏休みをものにできなかったアッコは、今年こそはと夏休みに対して異常なまでの執念を燃やしていた。そのおかげで夏休みを獲得できたのだが、肝心の航空券を忘れていたらしい。それほど熱心に勉強したということではあるのだが。

アッコが頑張って勉強していたのを知っていた手前、このままでは気まずい雰囲気にな

ってしまおうと思ったのか、ロッテは宥めるようにアッコの肩を軽く叩いた。

「まあまあ、受かったんだから去年より進歩してるよ。じゃあ、アッコは予定空いちちゃったってことなんだよね？」

再びアッコの上半身は軟体動物が如く机の上に張り付いた。アッコは机に突っ伏したまま潰れた蛙のような声で、

「そうなんだよねえ。あー、どうしようかなあ。折角の夏休みなのになあ」

「……えっと、スーシイはどうするの？」

ロッテがスーシイへ予定の話を振ったところが、アッコの中ではなんだか癩に障った。端的に言えば、スーシイが航空券の件を揶揄してきたことが、アッコはよっぽど気に食わなかった。

「どうせ、スーシイは今年もまたキノコのお世話でしょ」

口を嘴のように尖らせて、アッコはつまらなそうに言った。実際のところ、昨年はスーシイがキノコのお世話をするからと言って学校に残ってくれたのでアッコは死なずに

済んだ。箒の乗れない生徒が休暇中のルーナノヴァに滞在するのは餓死ルート一直線の意味する。

(あれはあれで、楽しかったけど——)

アッコの頭の中で、昨年 of 夏休みの記憶が浮かんでは消えていった。二人つきりで市場に行つて食材を選んだり、食べ切れないほどのお菓子を買つたり、映画館に行つたりもした。自分には補講があつたけど。

しかしアッコから「どうせ」と口にした以上、スーシイと一緒にいたいとは口が裂けても言いたくはなかつた。

スーシイはなんの言葉も返さないまま、黙っている。

アッコはスーシイの様子が気になつて、ちらりと一瞬だけ振り向いた。

スーシイは頬杖をついて、アッコのベッド、というか虚空を眺めているらしかった。

はあ、と小さなため息がアッコの耳に聞こえた気がした。

「……じゃあ、一緒にいる？」

「え」

アッコが今度こそ振り向くと、スーシイと目が合った。

「今年も」

スーシイの柘榴のような赤い瞳は、外から射し込む夏の光を孕んでいた。光は水面に反射した儂い輝きのようにも、鮮烈な輝きのようにも思えた。

それを見ていると、アッコはなんだか、胸が妙にどぎまぎしたのを感じた。

アッコはスーシイと交際を始めて二カ月ほどになる。だからと言って、夏は一緒にいたいというわけではなかつたし、付き合つていても自分のことは自分で決めたいとアッコは思っていた。

けれど、スーシイの誘いが、実に魅力的なものに思えてきてしまったのだ。本当の夏が始まるような、そんな気がして——。

「そ、そういうことなら、いてあげてもいいけど」

アッコは自分でも、頬が火照つて紅潮しているのを感じていた。スーシイに誘われたのが嬉しかったと言えば嘘になるし、可笑しな

ぐらいスーシイが格好良く見えてしまった。

「よかつたね、二人とも」

ロツテはほつとしたように、小さく微笑んだ。

航空券云々の話をした数日後、ルーナノヴァは終業式を迎えた。ホルブルック校長の実に有り難いお話を聞いた後、ルーナノヴァの生徒たちは次々と学園から離れていった。彼女たちはいずれも、大きな旅行鞆を箒にぶら下げて飛び立っていく。

そんな他の生徒たちの様子を、アッコは自室の窓から眺めていた。

ロツテも既に帰宅の途についてしまい、部屋にはアッコとスーシイの二人だけだった。

「アッコ、おかわりいる？」

そう言いながら、スーシイはティーポットを軽く持ち上げる。

アッコとスーシイはレイラインの停留所が混むのを嫌つて、自室でささやかなティーパーティーを催していた。

「ありがとう」

アッコはカップを差し出して、紅くて少しくすんだ色合いの液体が注がれていくのをじっと見ていた。注ぎ終わって、カップの身を一口含むと安心したように息を吐く。

(夏に熱い紅茶を飲むだなんて、日本じゃ考えられないなあ——)

アイステイーにしてしまうと、匂いが損なわれてしまう。故にイギリス人は冷たい紅茶を嫌うが、そもそもイギリスの夏には蒸し暑さがない。アッコは自分が避暑地にずっといるようなもの——そう思うことにした。

「ねえ、スーシィ。これ飲み終わったら、そろそろ行く？」

「そだね」

アッコが尋ねかけると、スーシィはこくと頷いた。

最初は航空券を取り忘れていたとぶうたれていたのに、今となってはまるで他の生徒たちと違う時間軸にいるみたいで、アッコはなんだが面白かった。

(もしかしたら、スーシィの魔法にかけられたのかもしれない)

アッコは魔法の効果を確かめるように、こっそりとスーシィの瞳を窺った。

赤い虹彩の中にきらりとした輝きを見つけると、アッコはスーシィによって——自分が本当に魔法をかけられたように思えてきて、なんだか安心した。

二人はティーセットを片付け終わると、出かける支度を始めた。アッコは箒を掴むと、嬉々としてスーシィを見る。

「そうだ、箒一本にしようよ！ 荷物少なくて済むじゃん」

「……なんでそれを、アッコが箒持ちながら言うワケ？」

スーシィはあたかもため息を吐くように言った。アッコは箒を抱き抱え、懇願するようにスーシィを見つめる。

(たまにはあたしが、スーシィを乗せたっていいじゃん)

「ほら。だって、折角あたし乗れるようになったんだし！」

「はあ……、じゃああたしがアッコの箒に乗るってこと？」

スーシィはいかがわしいものを見るような目つきでアッコを見ていたが、決して「ダメ」とは言わなかった。

そして表に出て、アッコの箒の後ろにスーシィが跨がると、アッコは物凄く緊張をし始めた。そつとアッコの肩にスーシィの細い手が添えられると、びくりと身体が跳ねそうになる。

「二人乗り大丈夫なの、アッコ」

念押しするようにスーシィは言った。誰だって墜落はしたくない。アッコはごくりと唾を飲み込んだ。

「わ、わかんないけど。……ティ、ティアフレーレ！」

ふわりと箒は浮かび上がり、二人の身体は箒ごと空に浮かんだ。

スーシィは安堵の息を漏らしながら、アッコの腰骨に手を回す。

「もう。アッコって、見てると本当にハラハラするよね」

「あはは。ごめんごめん」
腰に回されたスーシィの手の感触から、な

んだかんだで信用されているんだとアッコは嬉しく思っていた。

そしてレイラインを飛びながら、アッコは後ろのスーシイに話しかける。

「それで。今年の夏って、どこか行きたい所ある？ 映画館とか、遊園地とか——」

「野暮用で行かなきゃいけないところはあるけどね」

スーシイはちよつと乗り気ではなさそうな声を漏らす。スーシイのその反応は新鮮で、却ってアッコは興味が沸いた。

「野暮用？」

「アッコがいろいろ言うなら今日済ませちゃうよ。用事は早めに済ませたいし」

「うん、いいよ。あたし、カフェとかで待つてるから」

そうアッコが答えると、スーシイはほっとしたように「ありがと」と短く答えた。

「そのカフェでちよつと待ってて」

スーシイは街角にある一軒のカフェを指し示した。それからアッコを残して、スー

シイは薄暗い路地裏へと猫のように消えていく。

アッコはすぐにカフェに入ろうかと思つた。けれど、スーシイがどんな人と会うのか気になって、アッコはいつの間にか薄暗い路地裏に迷い込んでいた。

(……スーシイ、どこ行つたんだろ)

路地裏から抜け出すと、やけに古そうな煉瓦づくりの建物が建ち並ぶ一角に出た。きよろきよろと通りを見回していると、店先にいるスーシイの姿がガラス越しに見えた。古い木製のカウンター越しに、店主らしい女性と話し込んでいる。

女性の年齢は三十手前だろうか。しかし、そもそもアッコには魔女の年齢はよくわからないのだが。

「わ、綺麗な人」

思わず口にしてしまふぐらい、エキゾチックで綺麗な女性だった。あちらはとても愛嬌が感じられるような笑顔を浮かべて、あれこれとスーシイに色々話しかけているようだ。それを見ていると、アッコはなんだかも

やっとしたものを感じた。

(誰なんだろう)

スーシイの表情が見えなかったのは、幸か不幸なのかはわからない。ただ、心に靄のよくなものを抱えたまま、アッコはさつきスーシイが指し示していたカフェまで戻った。なにも見ていない自分を演じる為に、何事も無かったかのようにカフェオレを注文してテラス席で啜り始めた。

カフェオレを口に含んでみても、さつきの女性は誰なのか、アッコの頭の中はそれでいいぱいになっていた。つい、ため息を漏らして、落ち着かない素振りで見回す。

するとスーシイが戻って来たのが見えて、アッコはどういう顔をしたらいいのか戸惑ってしまった。

しかしスーシイはいつも通りの、ちよつと気だるそうな顔をしている。

「お待たせ」

「用事はもう済んだの？」

「……うん。あたしもなにか頼んでくる」
しばらくして、スーシイはオレンジジュ

スの入ったグラスを持って戻ってきた。

向かいの席に着くなり、スーシイは軽く首を傾げる。

「アッコ、なにかあった？」

「え、ううん。なんでもないよ」

どうやらアッコの戸惑いは顔に出ていたらしい。スーシイはただでさえ鋭いわけで、もしかしたら完全に見え透っているのかもしれない。

「もしかして、見てた？」

スーシイはアッコのカップの中身をじつと覗き見た。実際、カフェオレはそこまで減っていない。

嘘を吐いたところで勝ち目はないらしい。

アッコは靄が渦巻いていた胸の内を吐露するように、息を深く吐き出した。

「……うん。綺麗な人だなあって。あっちの人、すごいにこにこしてたし」

「ああ。作った魔法薬売り飛ばしただけなんだけどね。仕上がりがいいって」

「そっか。それならいいや」

アッコは、スーシイの作る魔法薬が一級品

であると信じていた。それに加えて、アッコ

はスーシイが自分の作った魔法薬の仕上がりが他者の作った魔法薬に比べていいか悪いかだなんて、日頃から微塵も考えていないように思える。だからスーシイの言ったことは妙に納得のできるもののように思えた。

片やスーシイは、さも意外なものを見たように目を僅かに見開いた。

「なら、って。アッコ、まさかそういうの気にしてたの？」

「……うん、まあ」

頷きながら、さっきの自分はどうにかしていたんじゃないかとアッコは思った。

口元を押さえながらも、スーシイはぎざついた歯を微かに覗かせる。

「ぶつぶ」

「えっ、なんで笑うの？」

「アッコって、そんなこと思うんだ。面白い」

まだスーシイの口元には笑みが残っていて、アッコはスーシイに余裕が満ち満ちているかのように思えた。

「だってスーシイがさ、綺麗な人ににこにこ

話しかけられてたら不安になるじゃん」

「そう？」

「あたしはそうなの！」

スーシイは澄ましたふうに首を傾げる。アッコはそんなスーシイが自分とは対照的に思えて、余計に自分が子どもっぽく思えてしまつて嫌になつてくる。

「ふーん。それ、アッコが言うんだね」

スーシイは目を細めながら、頬杖を突いている。

わざわざスーシイがそんなことを言うのも、目を細めているのも、アッコには理解ができなかった。

「えっ。なんで？」

「いや。別に」

「スーシイはさ、不安になつたりしないの？」

「さあね」

依然として、スーシイは楽しそうに笑っている。

「いつも、そうやって笑うんだもん。だからスーシイは、不安に思つたりしないのかなって」

「なってたとしても、あたしは教えないけどね」

「もう、なにそれ」

つい、アッコは頭を抱え込んだ。

微塵も、これっぽっちも、スーシイの考えていることがアッコにはわからなかった。こんなに好きなのに、スーシイの考えていることがわからなすぎて、アッコは自分のことが嫌になりそうだった。

「だって、わざわざ教えることもないでしょ」

「そうかな。あたしは、不安だったり、イヤだったりしたら、素直に言って欲しいかな」

「アッコ、そういうの伝えたら怒りそうだよね」

「酷いっ！ あたしそこまで心狭くないもん！」

「今のは割と素直に言ったけど？」

からん、とオレンジジュースの氷が音を立てた。

じつとりとしたスーシイの視線がアッコの胸に突き刺さる。ぐうの音も出なかった。

「うぎぎぎ……」

「さて。誰かさんの機嫌も悪くなったことだし、おやつにエクレールでも買って帰ろっか」

スーシイはオレンジジュースを空にして、ちらりとアッコを見た。やはりスーシイの目論見通り、アッコは目を輝かせ始める。

「エクレール？ うんっ！ あとブルドネージュとマカロンも！」

「はいはい、まあそんなに買えるかわかんないけど」

甘味とは恐ろしいものだ。先ほどまでケンカ寸前になりかけていた二人を、さっさと仲直りさせ、コロツと上機嫌にさせるのだから。

学校に戻るなり、アッコとスーシイはまたもやティーパーティーの支度を始める。

アッコはポットをお湯で温めているうちに、茶葉の缶が入った戸棚を開けた。多種の紅茶から怪しげなハーブティー、はたまた昆布茶まで揃っている。

今日のおやつはエクレールだし、どれを手に取るべきかちよつと考えて、アッコは後ろを振り返る。

スーシイはアッコのベッドの前にテーブル代わりの椅子を置き、ちょうどエクレーアの入った紙箱を開けようとしていた。

「ねえ。茶葉、なにが良い？」

「デインブラ」

スーシイは別段手を止めることなく淡々と答えた。どうやら彼女の中では固く決まっていることらしい。

「あー。爽やかだね」

「夏だから」

それもそうだと思って、アッコはティーヌプーンでポットに茶葉を放り込んだ。電気ケトルからお湯を注いで、ティーコジーを被せて机にポットを据える。それから、アッコのベッドに座っているスーシイの隣にそつと腰を下ろした。

「あたし、まさか今年の夏もここで過ごすとは思わなかったな」

言いながら、アッコは隣のスーシイの指に自分の指を絡めさせる。

スーシイも自分の指をアッコの指に絡めながら、静かに言った。

「そう？」

窓からそよ風が吹き込んで、スーシイの長い前髪が微かに揺れる。

隣を見ると、赤い瞳がこちらを見つめている。アッコは赤い虹彩に惹き込まれたように、視線を逸らせなくなってしまった。

「……去年はまだ、あたしはスーシイのことを全然知らなくてさ。まだ心が遠かった気がする。今でも近いかは、わからないけど」

「関係は変わったから、去年と違うとは思うけど？」

スーシイの目が、試すようにこちらを見ている。アッコは自嘲気味に笑った。スーシイのことがわからなくて、こんなに悩んでいるのだから。

「だと、いいな。だって、いつつもスーシイは余裕そうでさ、」

「ぶぶっ」

「ちよっと、なんで笑うのっ」

「だってアッコ、面白いし」

「あたしは真面目に考えてるもん……」

アッコはしゅんとして頭を垂れた。

そつとスーシイの手がアッコの頭をぽんぽんと撫でつける。

「はあ。……アッコってば、変なところで繊細だよな」

「あたしはいつでも繊細だもん」
きつと今、物凄くスーシイは気を遣ってくれている。それだけはよく理解できた。

「アッコ」
つい俯いていたけれど、アッコは呼ばれて顔を上げた。

顔を上げた途端、スーシイに唇を奪われる。薄く引き締まった形をしたスーシイの唇は、見ている分には綺麗な造形をしているようにしか見えない。しかし、唇を重ね合わせてみると些か冷えていて、それが妙に生々しく蠱惑的に思えてくる。

「……ん、」

アッコは軽く唇を塞がただけで、自然とスーシイの唇を一層求めていた。

あの唇には、なにか中毒性のようなものがあるんじゃないかと疑いたくなるが、口付けをしてくるのはスーシイからが殆どだから、

実のところはわからない。

「ん、んんっ……、あふ」

唇を啄まれて、甘い痺れが生まれていく。こっそりとアッコが目を開くと、スーシイは心底楽しそうにアッコの唇を貪っていた。

(……スーシイ、楽しそう)
アッコはちよっぴり複雑な心境だった。

自分は唇を重ね合わせられただけで余裕が無いのに、スーシイは楽しそうにこちらの唇の感触を味わっているわけで。

「ん、ふ……あ、っ」

「んん……っ、」

軽くスーシイの唇の隙間から吐息が漏れ出すと、その艶めかしさにアッコは胸が躍った。もう少し、スーシイの艶めかしい声が聞きたいと思ったとき、見計らったように唇を引き離された。夢が醒めてしまったように、現実引き戻された心地がした。若干の不満を抱きながらスーシイを見ると、スーシイはアッコの不満を見透かしているのか、目を細めて笑っていた。

「紅茶、もう蒸らし時間いいんじゃない？」

アッコの指に、今度はスーシイから指を絡めさせてきた。

(どう考えたって、確信犯じゃん)

苛立ちが沸き起こって、わざとアッコはきつくスーシイの手を握った。

「スーシイの馬鹿、」

「きひひっ」

軽く笑った後、スーシイは宥めるようにアッコの額に口付けを落とす。

悔しいけれど、そうされるのは嫌いではなくて、アッコは何にも言えなくなった。

口に広がっていくキャラメルと卵、バニラビーンズの香りに幸福を覚え、アッコは思わず感想を漏らした。

「あー、幸せ。ちゃんとした洋菓子屋さんのエクレーアって、日本であまり食べたことがなかったんだよね」

「ふうん」

スーシイはキャラメルのコーティングが施されたエクレールから口を離し、もぐもぐと咀嚼している。

「日本じゃシュークリーム……、あー。ク

リームパフはよくあるけど」

「靴油？」

露骨な笑いを浮かべて、スーシイはアッコを見た。恥ずかしい限りだと感じて、アッコは肩を竦める。

「もー、なんで日本人は中途半端にフランス語と英語の音取ったのかなあ」

「聞き取れなかったか、理解出来なかったんでしょ」

「多分そう。最近になって、やっと日本人もフランス語と英語の単語の違いが理解できるようになりましたって感じ」

「本当に極東だね」

エクレールを駆逐し終えて、スーシイはフランボワーズのクリームが詰まったマカロンを口に放り込む。

アッコは紅茶を口に流し込み、茶葉から放たれる香りで嫌気を灌ごうとした。

「あたしがルーナノヴァに来て、シャリオ好きだって言ったら散々馬鹿にされて——口ツテやスーシイとも本当の仲良しになれないんじゃないかって思った。外国だから差

別されても不思議じゃないし、日本は魔法後進国だし、どこの国からも遠く離れてる感じがしてさ」

「でもアッコって、日本人らしくないよね」

「えっ、酷い！」

「日本人って、もっと真面目でルールを守る筈なんだけど。だけどアッコって、全然日本人らしくない」

「う、うう……」

「だからじゃない？ だからアッコは距離なんてまるで無視してあたしたちに近づいてきた」

「そうかな、」

自分に自信がなくて、アッコは口ごもった。でもスーシイの優しい言葉が胸に染みこませて、アッコはスーシイの胸元へそっとたれ掛かる。

スーシイは何遍かアッコの頭を撫で回していた。けれど、頬まで手のひらを這わせるのと、そのまま頬をぐにいと摘んだ。

「い、いひゃいっ」

「悩むのはアッコらしくないし、マカロンで

も食べたなら？」

「……そうする、」

アッコは差し出されたお皿から、緑色のマカロンを掴んだ。口に入れると、ピスターシユの瑞々しい香りが広がっていく。

「はー、マカロン美味しい。ありがと、スーシイ」

スーシイは両手で頬杖を突き、安心したようにこちらを見ていた。

マカロンを飲み込むと、完全に楽しい気持ちが始ってきた。

「そういえば。買い出しは今日行っちゃったし、スーシイは明日何かしたいことある？」

「実験かな、アッコで」

スーシイは懐から小さくて透明な薬瓶を取り出した。なにやらスポイトで中身を吸引している。

「もう、今度は何の実験す——……んぐっ？」

喋っている途中で、容赦なくスポイトの中身が飛んできた。甘ったるいシロップみたいな味が口に広がってくる。アッコは反射で飲み込んでしまった。

「んげっ……。な、なに飲ませたの？」

「興奮剤」

いつも通りの冷ややかな口調で返しながら、スーシイは薬瓶に蓋をしていた。アッコは啞然とした顔でスーシイを見る。

「え。なんなの、それ……！」

スーシイはスポイトを椅子の上にそっと置くと、アッコの肩を後ろへと押した。抗う間もなく、アッコはぼふんと音を立ててベッドの上に倒れ込む。

「ちよ、ちよっと……ん、んんっ！」

飢えた獣のように、荒々しく唇を塞がれる。薬と花の匂いが入り混じったような香りが鼻腔の奥まで流し込まれ、アッコは頭の中が甘い毒で満たされた気がした。

「ん……あふ……、」

ぎざついた歯がこちらの唇を掠めたとき、アッコは今日のスーシイが『腹ぺこ』であると察した。きつと今日、もしかしたら明日まで、自分は丸裸にされて身体のだこもかしこも食べられてしまうのではないかとアッコは思った。

「ふ……はあ、んん……ッ」

舌が生き物のように蠢いて、アッコの口の中を自由に蹂躪する。舌を絡め取ったかと思えば、上顎を入念に舐られる。

「ん、ぐ……っ」

口に溜まったスーシイの唾液を飲み込む度に、アッコは甘い毒が身体の隅々に運ばれていく錯覚に陥った。

微かに瞼を開けると、スーシイの赤い瞳と目が合った。スーシイは気持ちよさそうにアッコの口の中を弄りながら、うっとりとした顔でアッコを見つめている。

「はあ……っ」

スーシイはねっとり舌を引き抜き、唇を離す。アッコの口の中には、スーシイに弄られた感覚がまだ痺れたように居座っていた。おかげでアッコの思考は定まらず、熱で浮ついた感覚に苛まれる。

その合間にスーシイは衣服を脱ぎ捨てて、下着姿を晒した。夏の陽射しが射し込む明るさの中に、スーシイの董色の下着は不思議なもののように感じられた。

「腹拵えは済んだところだし、丁度いいでしょ？」

スーシィは粘ついた舌で自分の唇をわざとらしく舐り、意地悪めいた笑みを浮かべてアッコを見下ろす。

「……よくない」

軽く首を振ったものの、当然のことながらアッコに抗う力なんてあるはずもない。易々とシャツを脱がされて、水色のブラジャーが晒される。背中の方にもするりと細い指が這わされたかと思うと、ブラジャーの金具がふつりと外された。そしてスーシィの細い指が、アッコの乳房の先に突った赤い野いちごを弾く。

「ひ……あ、っ！」

ぴりぴりとした快感が与えられ、アッコは思わず悲鳴をあげた。

スーシィは赤い野いちごを人差し指と親指で摘みあげると、親指の腹でぐりぐりといたぶり始める。

「んんッ、あ、ふ……っ！」

(身体が、熱い……)

きつと先ほど飲まされた、変な薬の所為だろう。こねくり回される乳房の先は、痛々しいほどに赤く尖りきっていて、じんじんと疼くように熱を帯びていた。

スーシィは赤い舌をちらつかせながら、満げに笑いかけてくる。

「アッコの乳首ってさ、綺麗だよ。真っ赤で、美味しそう」

「あ、味なんて……んあっ！」

するわけない、そう言いたかったのに言葉は遮られてしまった。

「んあッ、あ、あ……ッ」

ぢゆるぢゆると唾液の音を立てながら、スーシィは容赦なく吸い立ててくる。

渴きのような疼きと、電流のような甘い快感が合わさって、アッコは喘ぎ声を上げながらのたうち回ることしかできなかった。

「……ッ、ああっ！」

ぎざついたスーシィの歯が、赤い野いちごを食んだ。堪え難いほどの快感に、アッコは背中を仰け反らせる。けれど獣は決してこの獲物を逃がすつもりなどまるでなく、仰け反

ろうが何をしようがお構いなしといったふうで、執拗にぎざついた歯を野いちごに食い込ませていく。

「はあッ、ああ……う、ううッ！」

(スーシィの、馬鹿……っ。きつと薬の所為でこんな、あたしは……ッ)

アッコは快感のあまり、歯を食いしばっていた。鼻から息を吸い込む度に、スーシィの匂いが身体の奥に深く染みていく。まるで甘い毒を優しく流し込まれているかのようなだったが、先ほど飲まされた毒と、スーシィの匂いが反応し合っているようにも思えた。

「んああッ、ああ……っ！」

膨らんだ赤い野いちごが甘噛みされる度に、腰が引けてしまうほどの快感が流れ込む。やがて積み上がった疼きが、下腹部で騒ぎ出す。

「ふうん」

スーシィはふと手を止めて、まじまじとアッコを見つめていた。

アッコは下腹部の疼きが我慢できずに、膝を立てて壁の方に視線を逸らす。

「ああ。いつもより酷いね」

足の付け根に視線を落とし、スーシイは齒を覗かせて笑う。

「誰の所為でこんな……ひあッ！」

透明な蜜を垂らし、ひくついていた花卉の中へとスーシイは指を埋める。

きつとわざとだろう、熱く疼く花卉の奥を掻き混ぜると、ぐじゅぐじゅと淫らな音が聞こえてくる。誰もいないに等しい寄宿舎の静けさは、肌を重ね合わせる二人の行いを黙認しているかのようだった。

スーシイは花卉の合間から指を引き抜き、アッコの目の前で手指を広げて見せた。

「ほら、こんなに濡らしちゃってさ」

蜜塗れの手はてらてらと怪しく光っていて、アッコは思わず顔をしかめさせる。悔しさと羞恥が織り交ぜられて、壁の方へと顔を背けた。

「スーシイの、意地悪……っ」

身体のどこもかしこも熱かった。空気が割合乾いているのはありがたいが、夏であることに変わりはない。暑さと身体に籠もって

く熱が合わさって、アッコの額から玉滴となつて汗がふつふつと零れ落ちていくのがわかった。

「ふ、ああ……ッ！」

顔を背けるなり、またもや花卉の奥に指をねじ込まれる。ずちゅうう、と蜜を纏わせながら突き進む指が、中の柔らかな膣壁を刺激する。膣壁はスーシイの指を待ちわびていたかのように、動きに合わせて蠢き、ぴったりと食らいついて離さない。

「う、ああ、あ……っ！」

ぐちゃぐちゃと突き入れられる度に、快感が絶えることなく押し寄せてくる。アッコは奥へ奥へと繰り返される指の出し入れに思考や分別を放り捨ててしまひそうになる。

「んッ、あ、ああ……ッ！」

「あは。中がきゅううって、すごく締めてる……。いやらしいね、アッコ」

スーシイの顔は珍しく紅潮していて、興奮しきっているのがアッコの目にもすぐになわかった。囁きかけてくる吐息も熱っぽく、まるで彼女の興味関心全てがアッコに注がれ

ているかのようだった。

ぐりぐりと指が膣の天井とも言うべき子宮口に突き当たると、アッコは切なく声を漏らさざるを得なかった。

「ふ……ッ、あ、ああ……っ！」

すぐになわがくと身体が震えてきて、アッコは自分でもスーシイの長く華奢な指をぎちぎちと締め付けているのがわかった。スーシイは丸く突き出た子宮の入り口であるその突起を、執拗に指の腹で押し付けるように刺激してくる。

「んあ……ッ！ はあ、うう……ッ！」

本来ならば子を宿す場所の入り口を、愛欲と快楽の赴くままにスーシイは小突き回す。アッコには強すぎる刺激で、おぞましいほどの快感を生じさせていた。

「だ……め、おかしく、なっちゃ……んあっ、ああっ！」

こう口走ったのは、少なくともアッコの胸中に恐怖心が生じたためだ。(どうして、こんな……。やっぱりあの薬がいけないんだ、)

スーシイはアッコの目をじっと見つめ、微かに顔を歪めさせる。

「……おかしくなればいいじゃん。こんなに気持ちよさそうにして、こんな、こんなにぐずぐずにしてさ、」

「はああつ、スーシイ……？ んあッ……！」

スーシイの言葉の意味を探る余裕など、アッコにはなかった。すぐに思考は快感で塗り潰されてしまい、身体は甘い悲鳴を上げて身悶えを起こす。

「もつと……、もつと気持ちよくなればいいよ、アッコ」

ずちゅずちゅと何遍も何遍も、スーシイの手指は飽きることなくアッコの子宮の入り口を攻め立ていく。

片やアッコの花は、淫らな匂いのする蜜をたっぷり垂れ流し、スーシイの手指を逃すまいと捕食する。

（スーシイの、薬がいけないんだ——）

「っ、ああ……！ だめ、きちちゃ、う……！」

アッコは背中を反らせて堪えようとするものの、快感から逃れる術などありはしなかつた。こみ上げてくる、あたかも高みに至るような錯覚。それから逃れようと、びんと足を張るように放り出す。上り詰めた快楽に脳が焼き切れていき、思考は余すことなく白く白く塗り替えられていく。

「あつ、あつ、ああ……ッ！」

びくびくと身体が大きく震えては、同時に身体が沸き立つような快楽に包み込まれた。絶頂の瞬間、それこそ時間が止まったような感覚すらあった。けれど身体の痙攣が止むと、汗が身体から噴き出てきて、夏の暑さが纏わりついてくる。気怠い疲労感と幸福感が一体化された不思議な時間があった。

「スーシイ、」

息もろくに整わないうちに、アッコは身体を横たえたまま、そつとスーシイを呼んだ。スーシイは引き抜いた手指にべつとりとくつついた蜜を舌で満遍なく舐っている。

「なに」

この反応は、格好のおもちやを飼い主に取り上げられそうだと危機感を募らせた猫そのものだった。

スーシイが現在している行動について、絶頂したばかりのアッコには怒る気力があまりない。

「……ううん。キスして欲しかっただけ」
拗ねるようにごろんと寝返りを打ち、壁の方を向いた。

「アッコ」

呼ばれたけれど、アッコは返事をしなかった。今度はちよんちよんと肩を突つつかれるけれど、それも無視する。

「んがっ……！」

がしつと肩を捕まれて、ごろんと仰向きに転がされる。スーシイは赤い瞳でじつとりとこちらを睨むように見つめたものの、口ではなにも言わなかった。

窓から再び、風が吹き込んでくる。気怠く熱の籠もったアッコの身体には心地よく感じられた。風を心地よいと思っていたら、今度は細くてひんやりとした指がアッコの頬に触れる。

「アッコ」

もう一度、小さく名前を呼ばれた。

こうして赤い瞳に見つめられるのも、ひんやりとした手も、スーシイと同じ空間にいることも、頬に触れる長い髪の毛のくすぐったさも、どれもアッコには心地よかった。日本に帰るよりも、ずっとずっと魅力的な時間にした。考えた。

アッコの頬を右手で押さえ、スーシイは触れ合う程度の口付けをしてくる。

「ん……、」

キスが触れ合う程度であったからだろうか、アッコは無性にスーシイのことが欲しくなった。

(どうせ、薬の所為だ)

アッコは下から手を伸ばし、逆にスーシイの頬を掴んで引き寄せる。

珍しく、スーシイはちよつとびっくりしたような顔でこちらを見ていた。

「ふ……っ、」

唇を重ね合わせると、微かな吐息がスーシイの口の隙間から漏れ出た。アッコはその吐息を求めるように、スーシイの口を割って舌を差し入れる。

「ん、んんッ……」

アッコはがむしゃらに蛇のようにうねるスーシイの舌を絡め取り、ぬるぬると舌同士を摺り合わせようとする。

がつつこうとして、尖った歯が唇に食い込む。痛みを感じたもののアッコは怯まず、舌をうねらせた。

「んんっ、んぐ、ふ……っ」

甘く、少し苦しげなスーシイのくぐもった声が聞こえてくる。

(スーシイなら、普段もつとしてくるけど……苦しそうにしてるから、止めておこう)

アッコはそう思って、口から舌を引き抜く。唾液は線のように連なって光り、やがて途切れてはぼたりと下へ零れ落ちた。

「はあ……っ、アッコ……?」

スーシイはまだ動揺していた。

(あたしだって、スーシイが食べたい)

アッコは上半身を起こして、スーシイの董色のブラジャーを剥ぎ取った。それから、背中側を壁にして座らせる。

スーシイの頬は赤く染まっていて、いつも

よりずっと熱が感じられた。

スーシイの胸の先にある赤い実には、そつとアッコは手を伸ばす。

「っあ……!」

指先が微かに触れると、スーシイは切なげに顔を歪めさせた。

赤い実を指で軽くつまみ、指の腹を使って優しく刺激していく。

「あ、んんッ……」

スーシイの艶めかしい声に、アッコはぞくぞくしたものを覚えていた。

(スーシイの声、すごくいやらしい……)

もっと聞きたくなって、アッコは乳房の片方を口に含んだ。

「はあ……ッ、ん、んん……っ!」

肌からはスーシイの生薬と花の入り混じったような匂いが立ち上り、吸い込めば吸い込むほどにアッコは身体が火照ってくるのを感じていた。

その火照りはアッコを駆り立てて、スーシイの身体をただただ貪りたいという気持ちと結びついていった。

「アッコ……っ、あ、あぁっ」

ぶつくりとした赤い実を舌先で舐ると、スーシイはびくびくと身体を震わせる。声を震わせながら、スーシイがアッコの背中を抱いてきた。

アッコはスーシイに求められた心地がして、俄然やる気が湧いて出た。

普段、スーシイにこういった行為をされることはあるけれど、アッコがするというのは殆どない。故に艶めかしいスーシイの姿がアッコには新鮮に映るのだが、こんなにも敏感だと改めて思うと、アッコは夢中になって刺激を与えなくなった。

「んんっ……、あ、う……っ！」

スーシイは壁に背中をもたれさせたまま、切なげに声を漏らしている。声が漏れ出る度、ねっとり熱の籠もったスーシイの吐息がアッコの耳朵を掠めていく。

「ふ……っ、あぁ……っ！」

アッコが乳房の先を甘噛みすると、背中に回されたスーシイの腕に力が籠もった。

びくん、びくんと身体が震えて、スーシイ

から余裕の色が消えかけていた。

「あぁ、う……、はぁ……っ」

スーシイの目は、一見とろんとしていた。けれどアッコが乳房から顔を離してスーシイの顔色を窺うと、赤い瞳はアッコを見つけていた。アッコはそれに気づくと、じっとスーシイを見つめ返した。赤い瞳に吸い込まれそうになる。

「アッコ、」

スーシイが恋しそうにアッコを呼んだ。まるでキスを渴望されている気がして、アッコは唇を重ね合わせる。

すぐにスーシイの手が、アッコの背中を這うように抱く。

「ちゅ……っ、はぁ……っ」

「んっ……ふ……あ、」

唇を鳥のように啄むと、アッコにもじんわりとした甘い痺れが唇にはしっていった。溺れるようなキスを交わしながら、アッコはスーシイの足の付け根へと手を滑り込ませる。

ショーツを剥ぎ取ると花卉は熱く、そして

熟れきっていた。軽く指を這わせたただけで、濃厚な蜜がぬるりと指に纏わりつく。

「ん……っ、んんう……っ！」

唇を塞いだまま花卉をなぞり上げると、スーシイは苦しげに息を漏らす。

(かわいい……)

アッコは薬の所為で自分の脳はどうにかしてしまっただかと思っただ。さもなければ今の自分の行いはどうにかしているとまで思っただ。

「ふ……っ、んん……っ！」

こんなに苦しげにしているのに、スーシイは自分から唇を離そうとはしなかった。それが尚更アッコの興奮を煽り、もう少し悪戯をしたくなる。尖った花芯を、指の腹でぐりぐりと撫で回す。

「……っ、あ……！」

背中に回されたスーシイの手指が、アッコの肌に食い込む。けれどスーシイは懸命に爪を立てまいと我慢をしているのか、大した痛みはなかった。

ぐずぐずに垂れ続ける蜜を指に纏わせて、

花芯に蜜を塗りつける。蜜を塗り重ねるよう
に指を這わせる度に、スーシイの肩はびくん
びくんと小刻みに震える。

「ん……ッ、ふ……ッ！」

スーシイは自分から舌をアッコの口の中
に差し込んだ。しかし自分から弄るつもりは
ないらしく、唇のすぐ裏を舐めるのに留まっ
て、アッコが口の中に侵入するのを誘ってい
るかのようだった。

(……スーシイ、かわいい)

そのいじらしい行いにアッコは堪らなく
なって、スーシイの望み通り、再び舌を口の
中に差し入れる。

「はあ……あ、」

ねっとり舌と舌を絡ませたまま、アッコ
は秘芯を覆っていた包皮を親指と中指で捲
り上げる。

「は……ッ、ん……んんッ……！」

びくりとスーシイの身体が跳ねて、スー
シイの歯がアッコの舌に触れた。ちよつと痛
かったものの、スーシイが気持ちよさそうに
しているならアッコは構わなかった。

「んん……ッ、ん……！」

スーシイは、時折こくと喉を鳴らしてア
ッコの唾液を飲みながら、切なげに息を漏ら
す。

アッコは包皮を捲ったままの秘芯に、更に
蜜を塗りつけた。そして人差し指から薬指ま
で使って、スーシイの秘芯を優しくくすぐっ
ていく。

「ん、んう……ッ、あ……！」

スーシイは堪らなそうに、びくびくと身体
を震わせる。放り出した足のつま先にまで力
が込められていて、限界が近いような気配が
感じられた。

「はあ、あああ……っ！」

アッコはスーシイの舌をぢゆるぢゆると
吸い、混ざり合った唾液が口端から雫になっ
て垂れ落ちていく。ただただ、二人は一つに
溶け合うための行為をしていた。

そして秘芯を摘んだところで、スーシイは
びたりと動きを止めた。

「んッ、ん、んんッ——……！」

びくん、びくん、びくんと繰り返し痙攣し

ていく。スーシイの秘芯も、身体も、隅々ま
で激しく痙攣をした。

「はあ、はあ、は……っ」

アッコが舌を引き抜き、口を離すと、スー
シイは荒々しく息をしていた。息が整うまで
しばらく時間がかかりそうな様子をしてい
たが、スーシイは額に浮いた玉汗を気怠そう
に右手で拭っていた。

「お風呂、入る？」

恐る恐る尋ねると、スーシイはまだ息が整
わない調子のまま返事をする。

「……うん。お風呂、行こ」

「わかった」

アッコはそのままベッドから抜け出そう
とした。が、くるとスーシイの方に向き直
る。スーシイは不思議そうにアッコを見てい
た。アッコはそつとスーシイの唇にキスをし
て、スーシイの手を引いた。

ベッドを抜け出すと、二人して、そそくさ
と衣服を身に纏う。窓の向こうに映る景色は、
どれも茜色に染まっていた。アッコはお風呂
セットが入った自分のカゴと、スーシイのカ

も言いたくなるが、今日のアッコは素直にスーシイの言葉に従った。

浴槽に腰まで浸かったままだったら、のぼせている自信しかなかったが、この体勢を取らせるのはスーシイなりの配慮かもしれな

い。
アッコはバスタブの端を掴み、お尻をスーシイに向けた。そして恥じらいながら後ろをそっと振り返る。とても楽しそうに笑っているスーシイがいた。

「きひひっ。これなら、いやらしいところがくつきり見えるね」

「……ばか、」

前言撤回。スーシイなりの配慮なんてでありはしなかった。

アッコの下腹部は熱く疼き、花卉からは蜜が垂れ落ちてぬるぬると太ももを伝っていく。恥ずかしいけれど、快感を拒む余裕などアッコにはなかった。

スーシイは左手をアッコのお腹側から這わせていき、固く尖った秘芯にそっと触れる。

「っ、ああ……！」

秘芯に蜜を塗りつけて、先ほどアッコがしたのと同様に、指先で秘芯をくすぐってきた。

「ああ……っ、あ、んんッ……！」
気持ちよすぎて、アッコの足はがくがくと震え出す。

自分がしたのと全く同じことをされるのはちよつと癪だけれど、スーシイは気持ちよすぎて根に持っていたのかもしれない。

「はあっ、うう……ッ！」

浴室に自分の声が響くのが最初は気になっていた。けれど、次第に理性のたがが外れていって、アッコはもうよくなくなった。それどころか、今は絶えず花芯をくすぐられて、もどかしい気持ちで頭がいっぱいになっていた。ぐずぐずに濡れそぼった花卉の中へ、さっきのように指を激しく突き入れて、この中を埋めて欲しかった。

「んんッ……、お願いスーシイ……っ。入れて……？」

アッコが振り向いて懇願をすると、スーシイは目を細めて笑っていた。

「ふうん、いいよ。……ほら、」

そしてアッコが求めたように、束ねられた指が後ろからねじ込まれる。

「う……ッ、ああ……っ！」
スーシイの指は熱く蠢く腔壁をぐちゃぐちゃと掻き回し、アッコは激しく身体を震わせる。

次第に腔の浅いところから奥を目指すように、指は奥へ奥へと突き入れられていった。
「んっ、ああ……っ！」

腔壁を掻き回す快感とはまた別に、秘芯に強い電流のような快感がはしった。

スーシイは後ろから花卉の中へ指を突き入れたまま、前からは花芯をきりきりと摘む。
「はあ、あ、あ……両方、……っ？」

アッコは強過ぎる快感に、頭の中の回路が焼き切れそうになっていた。

透明ながらもねっとり濃厚な蜜が一気に溢れ出し、ぐちゅぐちゅと淫猥な音を響かせる。

「アッコ、こういうの好きでしょ？ ほら、もっとぐちゃぐちゃになってきた」

スーシイは堪らなそうに、弾んだ声音で囁

きかける。

湯気を含んだようなスーシイの湿っぽい吐息が耳朶をくすぐると、アッコはぞわぞわとしたものを感じた。それに加えて、興奮しきったスーシイの様子は、アッコの嗜虐心を一層煽り立てる。

「あぁっ……う、うう……ッ！」

突き上げるように中を弄られる感覚と、花芯を摘まれる甘い痺れが身体の奥底で織り交ぜられていく。織り交ぜられた快感はうずたかく積み上がって、恐ろしくなるほどの高い階段を作り上げる。

「んんッ……、あぁっ……ッ！」

一体いつ、自分はこの階段から飛び降りるのだろうか。積み上がった快感からの開放はそう遠くないように思えた。

「ひッ、あ、あぁ……ッ！」

膣壁と子宮口をぐちゅぐちゅと何遍も弄りながら、秘芯を優しく優しくいたぶられるのは快樂の地獄だった。

しかし快樂をより求めるように、アッコの膣壁はぎちぎちとスーシイの指を貪婪に締

めつける。花芯も更なる刺激を強請ってか、ぷっくりといやらしく尖りきっていた。

「あっ、んあぁッ、いく……ッ！」

アッコは自分の中で高ぶりきった快樂が、一気に放たれていくのを感じていた。積み上がった快感の階段から勢いよく落ちていく。

「はぁあぁ……っ、あっあっあぁ……ッ！」

深く深く沈み込むような絶頂に、アッコは恍惚としながら、為す術もなく身体を激しく震わせていった。

二人が風呂から上がった頃には、既に夜が訪れていた。

アッコはTシャツと短パン姿で、自分のベッドの端に腰かけていた。まだ湿っている髪の毛をタオルでがしがしと拭きながら、隣にいるスーシイの方を向く。

「ねえ。今日の薬、効きすぎじゃない？」

「最初から薬なんて入ってなかったけど？」

スーシイも同様に髪をタオルで拭きながら、何事もなかったかのように言葉を返した。外から入ってきた涼しい夜風が、ランプの

灯を微かに揺らす。

「え？ だって興奮剤って、」

髪を拭く手を止めて、アッコはスーシイを凝視する。

「興奮剤が入ってるから気持ちよくなるのは仕方ない。そう思えるでしょ。普段我慢してたことも、正当化して色々できるわけだし」

淡々と続きを喋りながら、スーシイはいまだに髪の毛を拭いていた。

恐らく、スーシイにとってはごく普通の事象にあたるのだろう。しかしアッコにそれが通じる筈もなく、顔を真っ赤にしてスーシイを睨んだ。

「ちよつと、騙したってこと？」

「だから今回はそういう実験だよ。プラシーボ効果はアッコにもあるってわかっただけで感動モノかな」

「なにそれ！ じゃあ、あたしは——」

アッコは声を荒げて、スーシイに掴みかかりそうになった。自分でも、うっかり今言いきかめたのを止めたのは、せめてもの救いかもしれない。

「アッコがスケベだっていうのは知ってるから。……でも安心しなよ。明日は本物の薬使ってあげる」

「え？」

びくり、とアッコの身体が跳ねた。スーシイはにんまりと笑って、指先でアッコの顎を上へ傾ける。

「明日の予定は、アッコで実験するって言ったでしょ？」

ゆらり、ゆらりとランプの灯は揺れた。それに合わせて二人の影もゆらゆらと揺れる。

「えっ、えええっ？」

動揺しながらも、アッコはスーシイの手を振り払えずにいた。しかし今度はスーシイからその手を下ろし、探るようにアッコを見つめる。

「気持ちよくなかった？」

「そりゃ……よかった、けど……」

(まずい、)

アッコはベッドの端ににじるように逃げようとした。けれど、スーシイはアッコの肩をがっちり掴んでくる。アッコは逃げ道が

一気に塞がれてしまった予感がした。

スーシイはぎざついた歯を覗かせて、これ見よがしに嬉しそうに笑った。柘榴みたいな赤い目が、ランプの灯を映してぎらりと光を反射する。

スーシイは、見透かしたようにアッコを見つめていた。アッコは身動きひとつできなくなっていた。

「ふうん。じゃあ、明日も実験に付き合ってくれるよね？」

「う……」

恥ずかしさのあまり堪えかねて、アッコは目を背ける。

ランプの灯は問い詰めるように、アッコの視界の隅でちかちかと踊る。心臓が、ばくばくと音を立てている。

(昨日から、あたしは)

そう。昨日から、おかしかったんだ——。ゆっくりとアッコは振り向いて、スーシイの瞳を静かに見つめていた。

Summer
holiday,
Again.

印刷所：松本コロタイプ光芸社

発行日：2017/12/30

発行者：tama(TEBACO)

連絡先：tama_suac@excite.co.jp